

# 中心市街地の街区空間の再構築研究

—蘇州庭園のシーケンスを参考に—

## Research on Pedestrian Space Design of Old Block

- Based on the Chinese Classical Gardens -

### ■ 喻 錚 Sou YU

愛知県立芸術大学大学院 関口研究室

Aichi University of the Arts

### ■ キーワード：市街地、街区、歩行空間、蘇州庭園、シーケンス

#### はじめに

現在、中国の都市は、現代的な都市計画理論と旧ソ連の都市計画思想の影響を受け、地域文脈の喪失や伝統的な豊かなヒューマンスケールの解体などの問題が生じている。近年では、建築分野の物質的な合理性だけでなく、独自のアイデンティティに基づく環境デザインの方法論が求められている。その切口の一つは、古来からの中国人の自然観を内包し、山水思想を表現した古典庭園を現代に活用する可能性である。一方、儒教国家である古代中国は、政治中心とした都市の空間構造になっており、明確に区別がされている。長い封建社会の中でヨーロッパのような広場、公園、緑道など庶民向けのパブリックスペースの概念すら存在していない。伝統社会における庶民の公共生活を営む場は、街路、寺院、市場などと言えるが、それらの空間も近代化以降の都市計画理論の影響を受けて衰退してしまった。歴史的な空間で現代パブリックスペースに参照できる資料が少ない現状と、西洋的な手法でなく、中国独自のアイデンティティを基盤として空間を改造するニーズから、古典庭園を参考に現代パブリックスペースに活用する可能性がデザイン領域で模索されている。

#### 1. 2021年度研究

2021年度の先行研究により、中国の古典庭園を代表する蘇州庭園は、見た目としての表層シンボル(亭、台、楼、閣、築山、池、植栽など)ではなく、核心となる独自の空間シーケンス表現が、現代に活用する鍵となることが分かった(図1)。また、蘇州庭園の空間特質を把握するために、文献調査による庭園の空間パターンをまとめた(図2)。

基本空間手法(歩きながら景色が変化し続ける原因 細部)

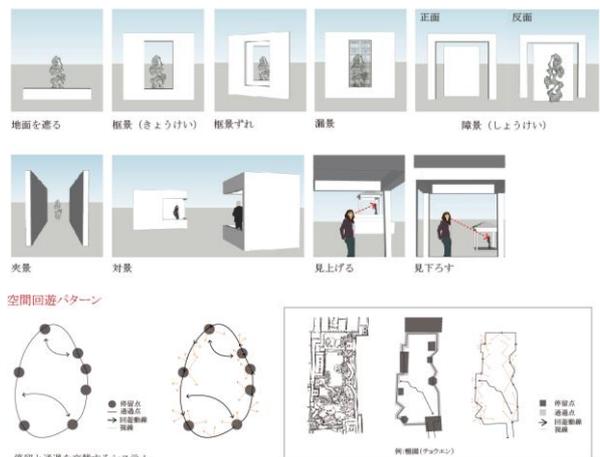


図1 中国古典庭園のパターン[注1]

基本空間パターン



基本空間配置パターン



基本空間構図パターン(歩きながら景色が変化し続ける原因 全体)

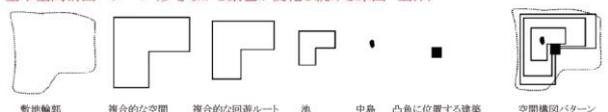


図2 中国古典庭園の基本空間手法、空間回遊パターン

## 2. 研究目的

中国において古典庭園を参照して現代パブリックスペースに活用する際には、現代的な都市計画思想の影響により、建築や景観のそれぞれの領域内(建築内部、私的な敷地領域内部、公園内部、広場内部など)で個別に議論する機会が多い。また、庭園回遊性の導入には、商業空間や公共施設空間など明確な目的を持つ生産空間になっているが、都市の視座から歩行空間、散策空間、生活空間に浸透・活用させる研究が全く足りない現状がある。中国以外の研究としては、日本の研究者の材野博司は、『庭園から都市へ シークエンスの日本』で回遊式庭園の空間特徴を誘因として都市空間に活用する可能性を指摘したが、どのように具体的なデザイン手法を利用してプロセスをたって具体案をつくるについては論じていない。これらをふまえて、庭園シークエンスを都市空間に活用し、最終的に一種新たな都市の生活空間パターンを創出することを本研究の目的とする。

## 3. 蘇州庭園空間シークエンスに関する研究

1949年の中華人民共和国成立後、劉敦楨、陳從周、童寯、潘谷西、彭一剛らは蘇州園林空間に対して一連の基礎測量と研究を行った。

庭園の観賞方法について、陳從周は『説園』で「動観と静観」をまとめ、静観は園中に長く滞在できる観賞点であり、動観は回遊ルートであると考えた[注2]。潘谷西はその上、「静観」は一つの場所にとどまって観賞する行為であり、「動観」は一定のルートに沿って入口から出口まで連続して観賞する過程であると結論づけた[注3]。

庭園の観賞点について、陳從周は『説園』で「仰ぎと俯き」に分け、景観の設置には人の視線変化を積極的に誘導する必要があると指摘した[注4]。彭一剛は『中国古典園林分析』で、地形変化と建築配置の角度から「仰ぎ」と「俯き」の関係を図解した[注5]。劉敦楨は『蘇州古典園林』で、「築山の高さは7メートルを超えず、観賞距離は12メートルから35メートルが多いこと」を例にして、観賞点と主景観の距離関係を論述した[注6]。潘谷西は「蘇州庭園の観賞点と観賞線路」で、「庁堂と築山の距離は30メートルから35メートル前後が多く、庁堂前の空間が小さい獅子林と滄浪亭は15メートル前後である」という測定結果について述べている[注7]。

庭園の回遊ルートについて、劉敦楨は『蘇州古典園林』で2パターンに分類した。一つ目は、主景観である築山や池を巡るため、回廊、建築、道路を接続する一つ閉じられた円形状の回遊ルートである。二つ目は、景観を自由にアクセスできる山道、洞窟、橋など園内ルートだ。また、庭園は基本的に円形状の回遊ルートの中にいくつかの園内ルートを組み込んでいることが指摘された。

以上の研究は、基本的に庭園空間の物理的特徴や人間の行動に基づいて庭園シークエンスをいくつかの要素に分解し、単一の要素の角度から空間シークエンスとの関連性を考察している。

近年コンピューター計算能力の向上によって、パラメトリックデザインの視点から多要素の相互影響である庭園シークエンスを捉え、庭園生成モデルを構築する研究も見られる。郭

軼非の「中国南方庭園の構成モデルの検証と構築研究」(2022)では、庭園シークエンス構成の役割という(動的鑑賞と静的鑑賞)から、「停留点」、「通過点」、「景」という三種類の属性を空間に付与し、空間を庭園構成の最小単位として定める[注8]。また、一つのシークエンスの変化点と関わる複数の「停留点」と「通過点」を、一つの「景観グループ」として定義づけている(図3)。

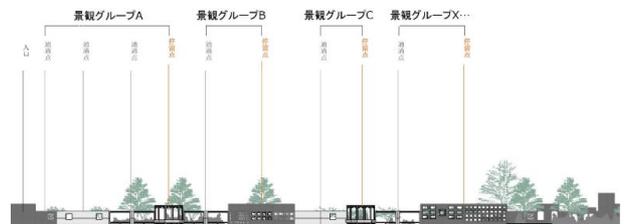


図3 郭軼非、「中国南方庭園の構成モデルの検証と構築研究」、愛知県立芸術大学、2022年、80頁

## 4. シークエンスの中国的都市空間

### 4.1. 研究の視点

本研究では、庭園シークエンスを都市空間デザインに活用し、新たな都市の生活空間パターンの創出を最終的な目標とするため、上述の研究でまとめた庭園空間特徴をどのように都市空間に転用するかが鍵となる。

門内輝行「建築・都市への記号論的アプローチと街並み記号論の展開」(2002)では、世界の美しい街並みの仕組みについて、以下の三つ共通点を指摘している。一つ目は、限られた数の要素の組合せから無限の景観のバリエーションが生成される(離散無限)。二つ目は、共有された要素が適当に変形・結合され、互いに類似しながら、それぞれに個性が感じられる魅力的な街並みが形成される(多様性)。三つ目は、類似と差異が織りなす街並みは、互いに他を生かすことによって自らの個性を発揮する機会を得る「共同体の景観」を形づくる。また、門内はハリデーらによって展開されている「体系文法」を参照し、街並みの景観は、①意味システム[自然・政治・経済・文化などのコンテクストに関わる]、②形式システム[形態素、屋根、格子、住居などの建築言語のシンタックスに関わる]、③実質システム[形状・スケール、色彩、素材・テクスチャなどに関わる]といった3つの「層」が重なり合う多層構造からなる「街並みのコード」によって記述されるとする[注9]。

上述の研究を参考に、記号学の視点による分析から蘇州庭園と伝統的な街並みの仕組みは、類するトポロジーの構造を持っていると考えられる。庭園のシークエンス視点から庭園を構成する記号のタイポロジーは、以下の三つに分類される。①長時間にわたって静的鑑賞できる「停留点」としての亭、台、楼、閣。②「停留点」を繋げる役割を果たす動的鑑賞が行われる「通過点」の回廊、橋、道路、園内ルート。③「停留点」と「通過点」を除く、「景」としての築山、池、植栽など。また、空間シークエンス視点から街並みを構成する記号のタイポロジーは、以下の三つに分類される。①長時間居られる「停留点」としての住宅、商業、公共施設など。②建築を包んで繋げる

役割を果たす「通過点」としてのポケットパーク、広場、街路、路地、隙間など。③「停留点」と「通過点」において、「景」として景観機能を特化する建築や空間(図4)。

シークエンス 視点の記号の タイポロジー	蘇州庭園	街並み
停留点	亭、台、楼、閣など長時間に静的鑑賞できる空間	住宅、商業、公共施設など長時間に居られる建築
通過点	回廊、橋、道路、園内ルートなど「停留点」を繋げる役割を果たす動的鑑賞が行われる空間	ポケットパーク、広場、街路、路地、隙間など、建築を包んで繋げる役割を果たす外部空間
景	「停留点」と「通過点」を除いて、築山、池、植栽など風景	「停留点」と「通過点」において、景観機能を特化する建築や空間

図4 蘇州庭園と伝統的な街並み空間記号のタイポロジー

庭園と伝統的な街並みの形式構成については、類似な特徴が見られる。亭、台、楼、閣、厅、坊、回廊などの建築類型は、空間の開口部分の位置、面積、開口面の数、階数、内部構造などの要素によって、空間のディテールが変化したが、形態文法としていづれも「屋根部分」、「軒下部分」、「ファサード部分」の三つのパターンで構成されている。そして、限られた物質要素が形式と素材の組合・変化によって、定型になった形態文法においても無限の空間バリエーションが生成される。また、空間と景観の配置変化によりさらに複雑な空間を生み出すことが可能だ。最終的には、伝統の街並みのような類似と差異を織りなして、豊かなディテールを持つ共同体景観が形成されている。

以上の分析から、蘇州庭園と伝統的な街並みのテキストは異なるが、類する構造を持っていると思われる。よって庭園の空間構成の視点から現状の都市環境を再定義・再分類・再構築することが可能だろう。現代中国の都市環境は、新しい開発に伴い環境の均質化やヒューマンスケールの解体などの問題が生じている。その一方で、地方都市の中心市街地は、歴史的な街並み、中庭、路地などの多様な外部空間や、古民家、モダン建築などの各種の建築類型が混在し、歩行空間シークエンスの豊かさが残されている。そのような街区は、伝統建築群地区のように一体観のある景観を形成しているのではなく、むしろいくつかの歴史的なレイヤーが積み重なり、生活空間の移ろいを表している。

しかし、現行の都市リノベーション事業において、そのような少し雑然とした感じられる街区は最も軽視されやすく、時代遅れとされ、文脈を無視して旧建築を一掃する再開発が行われるケースや、過度の商業再開発で街区本来の生活文化要素が破壊される事例が多く見られる。

このような状況から、本研究では地域区画整理事業・市街地再開発事業を求める街区において、蘇州庭園シークエンスを参考にし、散乱した物質的要素や歴史的要素を継承・再編成し、開放な回遊式庭園のような都市歩行空間の形成を構想し、新たな都市の生活空間パターンの創出の可能性を示すことが本研究の視点・目的とする。

#### 4.2. 研究方法

材野博司は、近代的都市空間で豊かなシークエンスを得

るために、「近代的都市空間パターンそのものの部分的改変を行いつつ、歴史的空間の保全・育成と新しい快適空間の整備を併行し、それらのネットワーク化をはかりながら、都市の日常生活空間全体の快適性を形成する」[注10]という方向が今後の日本で最も求められると考えていた。このことは、本研究の視点と合致していると思われる。

材野は、この方向に四つのモデルを提示している。①効率的近代街路自身の中に豊かさを重ね合わせる方法、②楽しみを主とする別な空間を新たに脇に導入する方法。また、空間の性格により、③別々の空間相互を結合しながら一体化してゆく場合、④そのままに分離しておくほうが、双方の価値が維持できると判断される場合である[注11]。さらに、この四つモデルのの組合せを A.「既存の街路空間の中に豊かさを導入する事業」と B.「豊かな新しい空間を導入する方向」の二方向で議論した。A方向を達成するためには、以下三つの方法を提示した。①コミュニティ道路やボンエルブ道路のような歩行者優先や歩車共存を道路自身で確保してゆく方法、②公開空地等建築の前の広場や空地による街路空間の変化の演出、③アトリウムやピロティ等建築空間自身による変化性の街路への浸透、建築形態の変化による立体的街並みの視覚的变化。B方向を達成するために、三つの方法が提示した。①新しく施行される区画整理事業段階で街路線形そのもの、及び公共空間地において外部空間が豊かなになる布石をすること、②地区詳細計画や建築協定等建築的形態誘導の可能な事業とセットすること、③再開発事業のような土地と建築を一体で整備する事業の助けを得ること。[注12]。

上述の研究を参考に、地域区画整理事業・市街地再開発事業を求める街区において、蘇州庭園シークエンスを活用する基本方法を A.「街区全体を庭園シークエンスに見立てる場合」と B.「街区の一部を庭園シークエンスで転換・融合する場合」の二パターンに考える。

A パターンは街区全体のテクスチャを着目し、その構造を読み取りながら都市の目線から庭園シークエンスの転用により、既存空間の増加、転換、変質、融合などの可能性を実験する。B パターンは、空間の目線から建築類型、建築と外部空間の接続タイプの再定義、再分類によって街区一部のテクスチャを再構築する(図5)。いずれも街区現状の多様性、差異性、可能性を認めることは再構築の前提と考えられる。

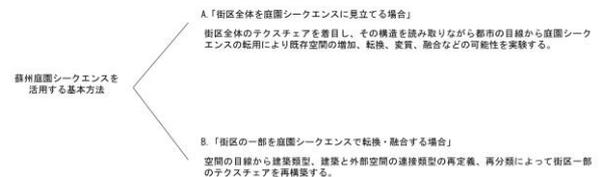


図5 蘇州庭園シークエンスを活用するための基本方法

研究の展開は、以下の方向で想定する。

まず、記号学の視点から地域区画整理事業・市街地再開発事業を求める街区のテキストを捉え、現時点の記号現象の仕組みを探究し、違う要素の関係構造を明確にする。その上、街区テキストを景観として捉え、庭園シークエンスの視点で街区テキストを「停留点」、「通過点」、「景」という再分類する可

能なパターンを検討すること。次に、再分類できた類型に基づいて空間ユニットを始め、既存の環境・物質要素との接続、変質、増加、融合、調整、修正など手法の利用を通して、街区要素を再編集する形式・構造の空間実験を行う。新しい生活空間パターンと相応な社会システムの構築を検討すること。最後に、生活と回遊の身体感覚の視点から街区の形式システムと実質システムを具象化すること。

## 5. 修了制作:黄岩区中心市街地司庁巷エリアデザイン

### 5.1. デザイン対象地のリサーチ

黄岩区は浙江中部の沿海に位置し、亜熱帯モンスーン性気候に属し、年間を通して温暖で湿潤な気候であり、有名な蜜柑産地と知られている。黄岩都城の立地は風水思想の影響を受け、水利事業と水運交通によって発展した。唐以来、城内にて水路は密集し、街と繋がったネットワークが形成された。しかし、1940年以降、都市化建設の加速に従って、元々江南水郷の特徴とした河道が埋め立てられて道路に拡張させるために詰め込まれていた。高層ビルの建設に加え、伝統都市のヒューマンスケールが徐々に消えていった。このような背景の下、中心市街区内にある大量の古民家が撤去されてしまう。

一方、まだ撤去されていない街区が歴史的な街並み、中庭、路地みみたいな外部空間や、古民家、モダン建築など多種多様の建築類型が混在し、歩行空間シークエンスの豊かさは残されている。デザイン対象地となった司庁巷エリアはこのような特徴を持つゆえ、街区をリノベーションする際、どのように「旧建築と新建築、旧世代と新世代」の関係性を調和していくのはポイントだと思っている。(図6)。

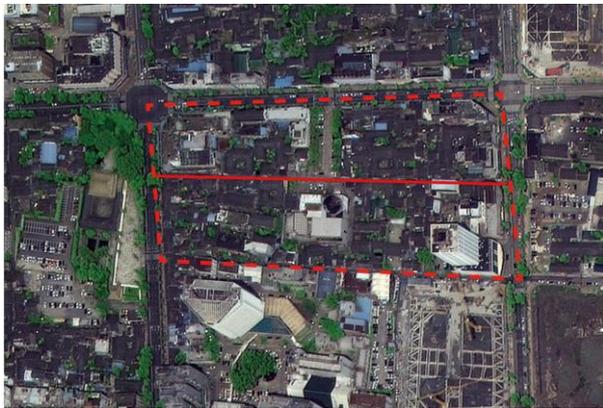


図6 司庁巷(赤実線)と司庁巷エリアの環境

### 5.2. 司庁巷の文脈と現状

司庁巷、元の名前は里仁坊。宋末、陳氏14世祖孝廉蔵庵公は、今の映画館の辺りに「花、月、書、礼」の4つの住宅を建った。花と月は、友人を宴席し、詩を連吟するための場所だった。書と礼は、子孫に教え、礼儀を習うための場所だった。「四」(4つの住宅を指す)が「司」の発音が近くゆえ、後人は「司庁巷」と誤伝された。1949年以前に主に住宅として使用されていた。1949年の土地改革以降、本来一家族一つ合院の状態から、複数の家族が一つ合院の所有権を分割し、

雑居して住む状態となった。そして1970年から1990年に渡って、日々混雑になりつつあった生活環境を改善するため、合院の改築やレンガコンクリート造りの建築が生まれて、街区全体の姿は1949年前より大きく変容されていた。90年以降、旧市街の位置優位性によって女性用品の販売を主業とした司庁巷商店街が形成してきたが、ネットショッピングの普及と新築されたショッピングモールの影響によって、来訪者は年々少なくなっている。一方、表層は商店街内は合院という住まい方はまだ残されていて(図7)、人々の住まい様子は隠されている(図8)。

住まいの現状に向ける、司庁巷エリアには幾つかの問題点が見えてきた。

まずエリア内部の視点から見ると

- 1、歴史風貌建築(古民家)はバラバラに点在されている。住民が好き勝手に増築、改築することが多い、加えてレンガコンクリート住宅や大型商業施設の建造、街並みの風景は断片化してきた。
- 2、建築の老朽化の進行によって、住まいを維持するための物理的な条件が欠けている。現住民は高齢者と移住者が主ため、町の活力が不足な状態となっている。
- 3、商店街の商売が単一ゆえ、住民のニーズに満たされないことが多い。
- 4、通り道の最狭処はただ3メートル。商店街の機能を活かすアクセスを構築するのは大変困難だった。みせが司庁巷の両側で均質的に分布し、通り道が全部直線となった商店街にいる客にとって、空間の体験性は不十分だった(図9)。
- 5、町に人が滞在できるオープンスペース、店舗、公共施設が不足する。



図7 司庁巷歴史風貌建築図

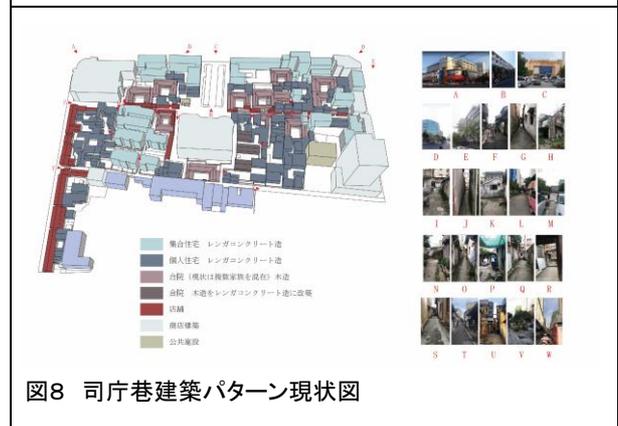


図8 司庁巷建築パターン現状図

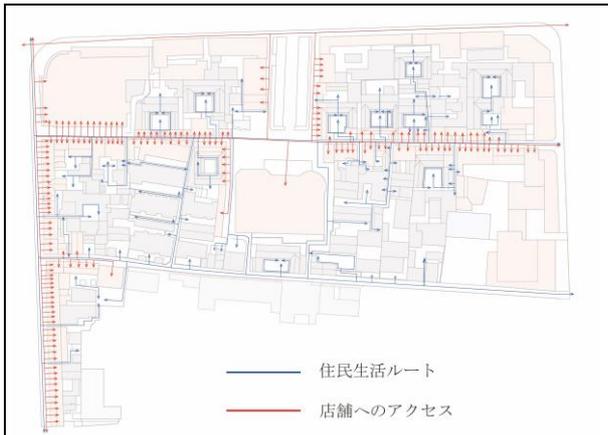


図9 回遊ルート現状図

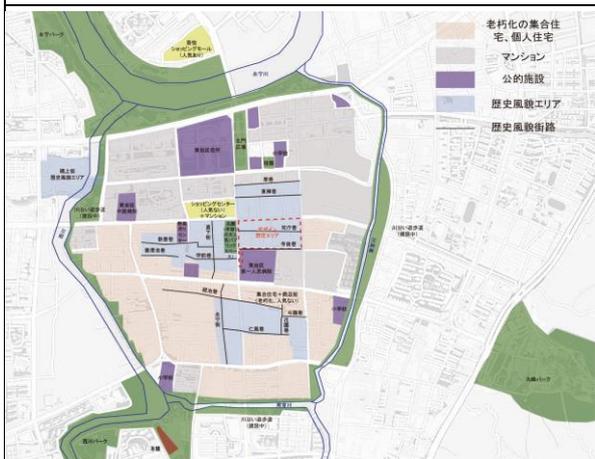


図10 黄岩中心市街地現状図

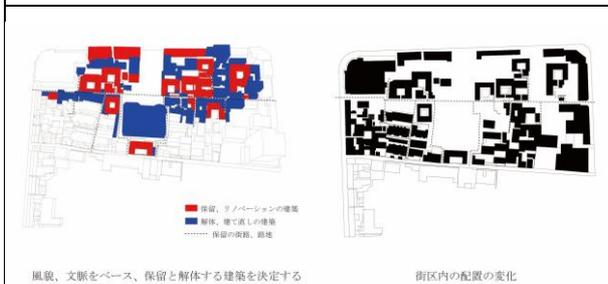


図11 街区配置の変化図



図12 エリア全体経路の再計画

そしてエリアと周辺環境の関係性の視点から見ると

1、エリアの西側にある孔子廟を除く、中心市街地では人が居られる場所は少ないこと。2、中心市街地では地域文化、芸術に関する公共施設は少ない(図10)。

### 5.3. リデザイン方針とコンセプト

街区リノベーション手法は1、合院と一部特徴が鮮明したレンガコンクリート建築を保留し、司庁巷古来の空間構造(東西ライン)、路地空間(南北ラインの街区の奥へ浸透した見え隠れの空間)を保つ。2、街区スケールに合わないモダン建築や、建て直す必要がある建築を一旦撤去とする(図11)。3、庭園の回遊性を念頭に置いて、街区全体のルートを再分配し(図12)、局所にて小範囲の更新から着手する。4、住民たちの意見を伺って、改造しかねるところを保留し、更新可能な店と住宅の空間をデザインし、新しい機能を付与する。5、地域文化と芸術施設を導入し、街中でパブリックスペースを増加させ、西側にある孔園の人流を緩和し、司庁巷エリアに新しい人並みを招き寄せる。

最終的には、旧建築と新建築、旧世代と新世代の関係性を調和し、「見え隠れ」を用いて蘇州庭園のようなヒューマンスケールの街区空間を作り上げると考えている。

### 5.4. プランニング

具体デザインを行う敷地は四庁巷の西側端点エリアを選定した。西側は孔子廟(唐に建てられ、現存する建物は清代1724年に再建されたもの。1990年頃その北で公共庭園である「孔園」を建設した。お年寄りが集まって、話するパブリックスペースとなった)である。北側は1984年から営業を始めた「黄岩百貨」だった。中心市街地にて最初の大型ショッピングセンター、地域の発展を支えていた)。南側は主にレンガコンクリート造の個人住宅で、東側は主に1980年以降の集合住宅だった(図13)。

ゾーニングでは、通り沿いの店舗の位置を維持し、街区スケールに合わない建築や、間取りが狭すぎる店舗を建て直し、店舗空間を街区内部まで延長させる。現在ある隙地、空き地、樹木、改築可能な住宅を利用し、表層にある店舗との空間回遊システムの構成を狙う。現住民との調和も考慮して、蘇州

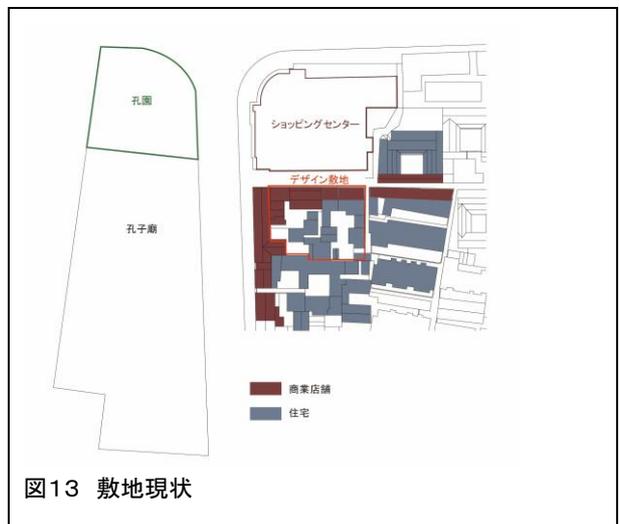


図13 敷地現状

庭園の見え隠れの空間特性を活用し、空間を分節しながら繋ぐ状態にさせ、奥に行くほど閑静の雰囲気を醸し出す。(図14)。

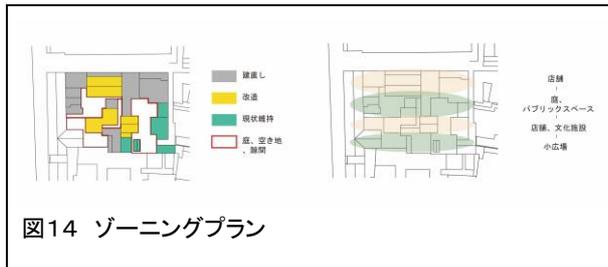


図14 ゾーニングプラン

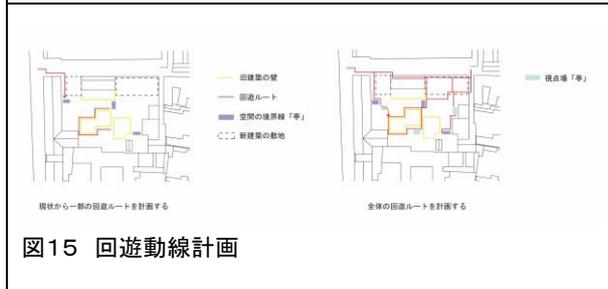
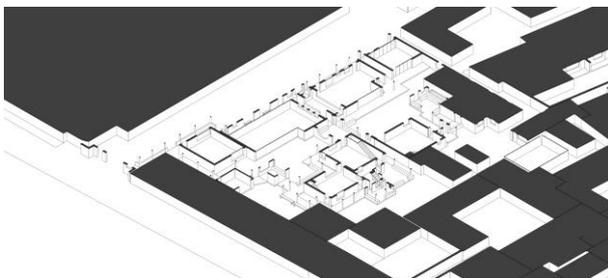


図15 回遊動線計画

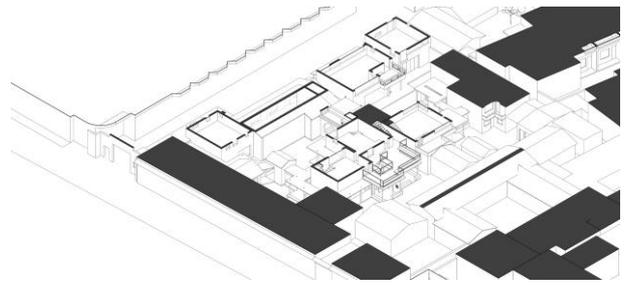
回遊動線計画には、回廊で新旧の建築を繋げ、入り口の牌坊から街区の内部までのルートが、『桃花源記』の中に理想郷へアプローチの記述「洞窟に入ると、最初は非常に狭くて一人しか通らなく、さらに数十歩進むと視界が急に広まり、桃花源が現れる」を参考して、回廊を利用して街区内部への誘導や空間シーケンスの変化を営んだ。現在の建築、庭、樹木などの位置関係に基づいて回廊の折り曲げをデザインした。また、空間の境界線、経路が重なるところで滞在、鑑賞できる「亭」のような停留点をいくつか設置して、空間シーケンスをより豊かことを狙った。

回遊ルートについて、庭園のパターンを参考して二つのポイントがあった。一つ目は、主景観を巡るため、回廊、建築、道路を接続する一つの閉じられた円形状の回遊ルートだ。二つ目は、景観を自由にアクセスできる園内ルートだ。本来の主景観である築山や池の部分は、基本的にパブリックスペースとするように考えた。また、周辺環境との関係性に基づいて、廊空間にあるいくつかの場所で欄干を設置し、空間を分割する役割を果たすことと共に、観光客や住民の交流、滞在、飲食などさまざまな行為を発生する可能性も考えた。

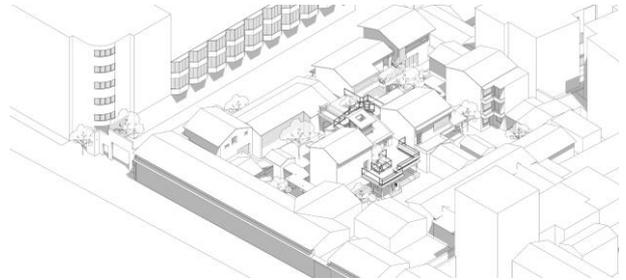
### 5.3. 作品



一階断面図



二階断面図



鳥瞰図

### 注、引用

- 1) 田朝陽、『中国古典园林与现代转译十五讲』、中国建筑工业出版社、2018、p100 p112 p129
- 2) 陈从周、『说园』、同济大学出版社、2007年、2頁
- 3) 潘谷西、『苏州园林的布局问题』、南工学报、1963年、45-65頁
- 4) 陈从周、『说园』、同济大学出版社、2007年、3-4頁
- 5) 彭一刚、『苏州古典园林』、中国建筑工业出版社、1979年、図版 53-57頁
- 6) 刘敦楨、『中国古典园林分析』、中国建筑工业出版社、1986年、11頁
- 7) 潘谷西、「苏州园林的观赏点和观赏路线」、建筑学报、1963年、14-18頁
- 8) 郭軼非、「中国南方庭園の構成モデルの検証と構築研究」、愛知県立芸術大学、2022年、81-82頁
- 9) 門内輝行、「建築・都市への記号論的アプローチと街並み記号論の展開」、デザイン学研究特集号、2002年、22頁 27頁
- 10) 材野博司、『庭園から都市へ—シーケンスの日本』、鹿島出版社、1997年、210頁
- 11) 10の文献、211頁
- 12) 10の文献、212頁

### 他参考文献

- ・ 材野博司、『庭園から都市へ—シーケンスの日本』、鹿島出版社、1997年
- ・ 槇文彦、『見えがくれする都市』、鹿島出版社、1980年
- ・ 王澍、『造房子』、湖南美術出版社、2016年
- ・ 王澍、「虚构城市」、同济大学、2000年